The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	2007年度 海外調査活動記録
Author(s)	大坪, 慶之; 片山, 剛
Citation	近代東アジア土地調査事業研究ニューズレター. 2008, 3, p. 71-78
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/26989
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

2007 年度 海外調査活動記録

大坪慶之・片山 剛

はじめに

2007 年度は、代表者・片山剛による 7 月の 2 日間の南京調査、および主要な海外調査として、二回にわたる台湾調査を実施した（ほかに、分担者・濱島敦俊による 1 月の上海調査がある）。台湾調査の目的は主に二つある。第一は、2008 年度に広東省・南京市で実施を予定している農村実地調査のために必要な地図・文字史料を収集することである。具体的には、前年度までに収集・分析した『広東省田畝調査冊』と南京市江心洲の地籍図とに関連する同時代の地図・文字史料の収集（①地政一般に関する史料、②広東省各級政府刊行の公報・報告書の類、③江心洲のみならず、南京市全体にかかわる地政関係の公文書等）である[1]。第二は、収集した史料を分析するうえで関連してくる研究文献の収集である。以下、7 月の南京調査、8～9 月の台湾調査、12 月の台湾調査の順で活動を記録しておく。

１．南京調査（7 月 1 日～7 月 3 日）

片山剛（大阪大学教授）が、6 月 28 日～7 月 1 日に上海大学で開催される国際シンポジウム「区域社会与文化類型」に出席し、「珠江三角洲地区“漢族社会”的形成及其社会、文化特徴」を報告する機会を利用し、南京に足を伸ばして短期間の調査を実施した。

6 月 28 日（木）【関空発⇒上海着】東方航空 MU516 便

28 日夕刻に上海着。29・30 日にシンポジウムに出席（29 日に報告）。宿舎は上海大学。

7 月 1 日（日）【上海発⇒南京着】高速鉄道

濱島敦俊（東洋文庫研究員。別途経費で来華）、朱海濱（復旦大学副教授）とともに高速鉄道（中国の新幹線。二等車）で、上海から南京へ移動。

夜、南京大学歴史系の范金民・夏維中両教授と会食。宿舎は南京古南都飯店。

7 月 2 日（月）江心洲（南京市建鄴区）

濱島・朱・片山の 3 名で江心洲実地調査を行う。江心洲街道弁事処を表敬訪問し、朱学宏氏（1957 年生）から短時間の聞き取りをしたのち、午前は、東宏村の王立栄氏（83 歳、1925 年生）を、午後は、2006 年 12 月に発見した土地廟を再建した紅光大隊長江小隊の朱遠財氏（75 歳、1933 年生）を採訪する（次頁写真参照）。

[1] 前年度までの調査の成果については、『近代東アジア土地調査事業 ニューズレター』1 号，2006 年 3 月／同 2 号，2007 年 3 月を参照されたい。

7 月 3 日（火）南京市档案館（南京市玄武区）／【南京発⇒上海着】高速鉄道

朝、蘇北の塩城市東台へ向かう濱島と別れ、片山・朱は南京市档案館で档案資料の閲覧・収集を行う。2006 年 12 月に荒武達朗が惜しくも抄写を完了できなかった「37 年度災歉状況表」中の江心洲関係を中心に、朱海濱が档案を抄写する。片山は『南京市地政局工作報告 民国 34 年 9 月至 36 年 8 月』『南京市参議会第一届第二次大会 南京市地政局工作報告 36 年 3 月 31 日編印』等を新たに閲覧し、電子複写を依頼するが、全コピーは不可とのことで、一部のみをコピーする。

夕刻、南京から上海へ高速鉄道（今度は一等車）で移動。宿舎は中福大酒店。

7 月 4 日（水）【上海発⇒関空着】東方航空 MU731 便

片山が早朝の東方航空便で帰国。

東宏村の王立栄氏と奥さん

朱遠財氏とかれの土地廟

２．第一回台湾調査（8 月 20 日～9 月 9 日）

8 月 20 日（月）【関空発⇒台北着】日本アジア航空 EG217 便

片山剛（大阪大学教授）、田口宏二朗（追手門大学講師）、大坪慶之・山本一（ともに大阪大学大学院博士後期課程）の四名が台北に到着。宿舎は中央研究院学術活動中心。

8 月 21 日（火）中央研究院近代史研究所档案館（台北市）

四名で調査開始。昨年 8 月の調査を継続し、民国期の土地調査事業関係の資料を探索・閲覧する。片山・大坪は経済档案を、田口・山本は汪精衛档案を閲覧するも、有用な資料は少なかった。

昼、中央研究院近代史研究所の巫仁恕副研究員と会食する。

8 月 22 日（水）中央研究院近代史研究所図書館（台北市）

昨年 8 月の調査で未了となった 1930～40 年代の広東省および南京市関係の政府公報・新地方志などの文献から、土地調査事業関係の記事を複写する。

8 月 23 日（木）中央研究院近代史研究所図書館

昨日の作業を継続する。片山・大坪・山本の三名は、江心洲が南京市に編入された時期を確定するべく、南京関係の書籍を閲覧する。その結果、江心洲の南京市編入は 1934 年であったことが判明する。田口は、地政一般に関連する書籍の閲覧・複写に務める。

この日、別科研で調査に来た小林茂（大阪大学教授）、渡辺理絵（茨城大学非常勤講師）が合流、翌日から共同で調査する。

8 月 24 日（金）中央研究院近代史研究所図書館

小林・渡辺を加えた総勢六名で調査を継続する。

夜、国立花蓮教育大学の郭俊麟氏と会食する。

8 月 25 日（土）国立中央図書館台湾分館（以下、台湾分館と略記。台北県中和市）

午前中、郭俊麟氏に Google Earth が閲覧提供している現在の地形と、古地図のそれとを組み合わせた新しい研究方法のデモンストレーションをしていただいた。それは開発史、とりわけ土地利用の変化を研究するうえで有用な方法であった。

午後は、国立中央図書館台湾分館に移動して資料調査を行う。台湾分館では、改装工事の結果、雑誌や書籍の配架が変更されており、昨年度までの調査記録が一部役に立たなくなっていた。そのため、必要となる雑誌・書籍の配架場所を確認する作業からやり直すことになった。

8 月 26 日（日）

図書館・文書館が休みのため、午前中は台湾歴史博物館・旧布政司衙門、午後は龍山寺を見学して過ごす。

8 月 27 日（月）中央研究院近代史研究所図書館

小林・渡辺とは別行動を取り、片山・田口・大坪・山本の四名で作業を再開する。田口・山本は地政関係の資料収集を継続する。片山・大坪は所蔵されている地図を閲覧し、中国大陸のカラー地図を発見する。広東省・江蘇省を中心に調べた結果、この地図は 1970 年代に、聯合勤務総司令部測量署が作製したもので、縮尺は五万分の一である。本地図の整理番号は「xxxxⅠ」「xxxxⅡ」「xxxxⅢ」「xxxxⅣ」と、4 桁の同一番号の次にⅠ～Ⅳを付されたものが 4 枚あり、この 4 枚はぴったりと接合する。これは、「xxxx」の番号をもつ 1 枚の原図（十万分の一の地図）を四分割したうえで拡大した結果と推測される。なお、地図下部の説明書きから、本地図は 1950 年代にアメリカ軍が撮影した中国大陸の空中写真をもと

に作製されたことが判明する。

この日、稲田清一（甲南大学教授）が台北に到着する。夜、中央研究院近代史研究所の陳慈玉研究員、同巫仁恕副研究員、同歴史語言研究所の于志嘉研究員、同陳熙遠助研究員と会食する。

8 月 28 日（火）中央研究院人文科学連合図書館（台北市）／同近代史研究所図書館

稲田を加えた総勢七名で調査を継続する。午前中は、中央研究院歴史語言研究所の范毅軍研究員、同計算中心の廖泫銘氏に、開館間もない中央研究院人文科学連合図書館を案内してもらい、現在整理中の広東省・江蘇省の民国期に作製された地図を閲覧する。閲覧した地図の一部については、スキャンしたデジタルファイルを提供していただいた。

午後は、近代史研究所図書館に移動し、片山・稲田・田口・大坪・山本の五名で調査する（小林・渡辺とは別行動）。稲田・田口・山本は地政関係の資料収集を継続する。片山・大坪は昨日発見したカラー地図の原寸大コピーの可否を尋ねる。

夕方、宿舎を福華国際文教会館に移す。

8 月 29 日（水）中央研究院近代史研究所図書館

片山・稲田・田口・大坪・山本の五名で、引き続き地政関係の資料収集を行う。昨日打診したカラー地図の原寸大コピーは「不可」との回答を得る。理由は、本地図が元来軍事目的に作製された経緯から、法律上許されるのは閲覧のみ、ということであった。

夜、中央研究院人文社会科学研究中心・近代史研究所の劉石吉研究員、台湾科技大学の陳淑銖副教授と会食する。

8 月 30 日（木）国史館（台北県新店市）

片山・稲田・田口・大坪・山本の五名で調査を行う。片山・田口は旧南京市政府档案を閲覧し、地政関係の資料を収集する。稲田は浙江省の地図などをコピーする。大坪・山本は、大阪でエクセル入力済みの地籍原図[2]のデータを、現物所載のデータと照合する作業を行う。

この日、小林・渡辺が帰国する。

8 月 31 日（金）台湾分館／国史館

この日は、二班に分かれて活動する。片山・大坪・山本の三名は台湾分館へ行き、『広東省田畝調査冊』および『広東省政府公報』などの閲覧・デジカメ撮影を行う。稲田・田口の両名は国史館へ行き、民国期南京市における「他項権利」関係の資料を中心に閲覧する。「他項権利」関係の資料の詳細については、本ニューズレター所収の田口宏二朗「南京国民政府時期の土地登記と「他項権利」: 国史館蔵「土地他項権利証明書存根」試探」を参照

[2] 地籍原図については、大坪慶之・山本一・片山剛・荒武達朗「台湾収集の地形図および地籍図について」『近代東アジア土地調査事業研究 ニューズレター』2 号，2007 年 3 月，pp.121-140 参照。

されたい。

夜、中央研究院近代史研究所の巫仁恕副研究員、九州大学法学部の西英昭准教授と会食する。

9月1日（土）台湾分館

『広東省政府公報』所載の地政関係資料を収集する。この日は、大坪・山本が必要箇所をリストアップし、片山・田口が確認・デジカメ撮影という分担で作業を行う。外出して昼食を摂っている最中に、突然の豪雨に見舞われたため、台湾分館に戻れず、午後の作業が予定より大幅に遅れた。

この日、稲田が帰国する。

9月2日（日）台湾分館

午前中、片山が東京女子大学の栗原純教授と会い、台湾総督府文書の利用法の手ほどきを受ける。午後、昨日の遅れを挽回するべく、休日返上で作業を行う。『広東省政府公報』に掲載されているはずの「広東省財政庁修正田畝捐章程」を探すも、見つけるに至らなかった。なお、後日の12月台湾調査の際に、この「修正田畝捐章程」を掲載する222期（民国22年5月10日出版）が破損のため別置されており、我々が閲覧できなかったためであることが判明する（第二回調査12月26日参照）。

9月3日（月）国史館

午前中、片山・山本の両名は地籍原図のデータ照合作業を行う。田口は「他項権利」関係の調査を継続する。大坪は国民政府档案を閲覧し、南京市の境界の変化について調べる。午後は、全員で地籍原図のデータ照合作業に没頭する。

9月4日（火）国史館

終日、地籍原図のデータ照合作業を行う。地籍原図所載の土地が5000余筆あるため、作業は当初の予測に反して難航する。

夜、政治大学の唐立宗氏と会食する。

9月5日（水）国史館

終日、地籍原図の照合作業を継続する。照合が済んだものはまだ全体の約70%に止まる。

9月6日（木）国史館

引き続き、地籍原図の照合作業を行う。この日、照合作業がほぼ完了する。

9月7日（金）台湾分館／国史館

午前は、郵便局で収集・複写した資料の日本への郵送手続きを行う。

昼、楽学書局の店主と会食する。

午後は、二班に分かれる。片山・田口は台湾分館で広東関係の関連書籍の閲覧・デジカメ撮影を行う。大坪・山本は国史館で、まず地籍原図の照合作業を完了し、その後は国民政府档案を閲覧する。閲覧したのは、南京市北部に位置し、長江の中洲である八卦洲の開発状況、南京市に移住してきた人々に関わる档案である。

夜、国立暨南国際大学の徐泓教授、同王鴻泰副教授、中央研究院歴史語言研究所の邱澎生副研究員、および徐泓教授の歴代の指導学生多数と会食する。

9 月 8 日（土）台湾分館

午前中は、次回の調査に備え、広東省の県レベルの政府公報に関する所蔵状況を調べる。午後は、『広東省政府公報』、『高要県政府公報』の閲覧・デジカメ撮影を行う。

9 月 9 日（日）　【台北発⇒関空着】日本アジア航空 EG218 便

片山・田口・大坪・山本の四名が三週間の調査を終え帰国。

３．第二回台湾調査（12 月 17 日～28 日）

12 月 17 日（月）【関空発⇒台北着】キャセイパシフィック航空 CX565 便など

荒武達朗（徳島大学准教授）、山本一（大阪大学大学院博士後期課程）、沼田英年（同前期課程）の三名が台北に到着。宿舎は福華国際文教会館。

12 月 18 日（火）中央研究院近代史研究所図書館（台北市）

三名で資料調査を開始する。荒武は青島の地政関係の資料を閲覧･複写する。また山本・沼田の両名は、夏の第一回調査で所蔵を確認していた『蘇北土地改革文献』を閲覧・複写する。

昼、中央研究院近代史研究所の巫仁恕副研究員と会食する。

12 月 19 日（水）国史館（台北県新店市）

夏の第一回調査では、1930 年半ばの南京市街地の 1 区～6 区を対象とする「土地他項権利証明書存根」のうち、1 区と 2 区を閲覧・複写しただけであったので、本日から残りの 3 区～6 区の部分の閲覧・複写を始めた。

この日、大坪慶之（大阪大学大学院博士後期課程）が台北に到着する。

12 月 20 日（木）国史館

山本・沼田は昨日に続き、「他項権利証明書存根」を閲覧・コピーする。荒武・大坪は国民政府・行政院・前南京市政府の档案から、土地調査事業に関連する資料を閲覧する。

12 月 21 日（金）国史館

土地調査事業に関する档案の閲覧・コピーを継続する。また大坪は、民国期の南京における旗地関係の档案を閲覧する。旗地関係档案の詳細については、本ニューズレター所収の、大坪慶之「台湾収集の民国期南京における旗地関係档案」を参照されたい。

この日、荒武が帰国。片山剛（大阪大学教授）が台北に到着する。

12 月 22 日（土）国立中央図書館台湾分館（以下、台湾分館と略記。台北県中和市）

片山が台湾文館で、『地政月刊』、『広東省政府公報』、広東省の県レベルの政府公報を閲覧する。大坪・山本・沼田の三名は、午前中に故宮博物院を見学した後、午後から書店にて関連書籍を収集する。

12 月 23 日（日）　台湾分館

片山・大坪・山本・沼田の四名で資料調査を行う。昨日に片山が閲覧した『地政月刊』等誌の必要箇所をデジカメ撮影するとともに、『広東省政府公報』民国 20～21 年の部分を閲覧し、必要箇所のリストアップを行う。

12 月 24 日（月）国史館

片山は広東省の地政関係の档案を閲覧・複写する。大坪・山本・沼田の三名は、南京市の土地調査事業に関連する档案の閲覧・複写を継続する。

12 月 25 日（火）台湾分館

23 日に『広東省政府公報』の民国 20～21 年の分からリストアップした記事のデジカメ撮影を行うとともに、同公報の民国 18～19 年分の閲覧・デジカメ撮影を行う。この時期は、1930 年代の「田畝調査」[3]を実施する前に試みられたが、失敗に終わった「田畝陳報」関連の記事、および「田畝捐章程」に関する記事が多い。

12 月 26 日（水）台湾分館

『広東省政府公報』民国 26～27 年の閲覧・デジカメ撮影を行う。また片山・大坪・山本は、『高要県政府公報』、『広東省政府週報』を閲覧し、デジカメ撮影を行う。なおこの日、夏の第一回調査で見つけることのできなかった「修正田畝捐章程」を掲載する号が（第一回調査 9 月 2 日参照）、台湾分館では破損のため別置されており、閲覧不可であることが判明する。

夜、中央研究院近代史研究所の巫仁恕副研究員・政治大学の唐立宗氏と会食する。

[3] 1930 年代に広東省で実施された田畝調査については、片山剛「1930 年代広東省の『田畝調査冊』の性格と作成経緯」『近代東アジア土地調査事業研究 ニューズレター』1 号，2006 年 3 月，pp.2-13 参照。

12 月 27 日（木）台湾大学図書館（台北市）／台湾分館

午前は、台湾大学図書館へ行き、台湾分館では欠号・閲覧不可になっている『広東省政府公報』、『南京市政府公報』（ともにマイクロフィルム）を閲覧・プリントする。しかし『南京市政府公報』のマイクロフィルムは撮影状態が悪く、一部のプリントのみに終わる。また、『広東省政府年刊』を閲覧・コピーする。

午後は、台湾分館で引き続き『広東省政府週報』のデジカメ撮影を行うとともに、『広東財政公報』民国 18～19 年の閲覧・デジカメ撮影を行う。

12 月 28 日（金）【台北発⇒関西着】キャセイパシフィック航空 CX564 便

片山・大坪・山本・沼田の四名が帰国。

おわりに

本年度の二回にわたる台湾調査では、民国期における広東省・南京市の地政関係の資料を大量に収集し、おおむね所期の目的を果たすことができた。次年度は、これらの資料を整理・分析したうえで、本格的な農村実地調査を行う。実地調査先としては、広東省高要県第八区騰江郷（白藤岡郷とも呼ぶ。現在の金江郷）と南京市江心洲とを予定している。また、広東省档案館・中山図書館（ともに広州市）や、第二歴史档案館・南京市档案館（ともに南京市）などにおいて、引き続き資料収集を行う予定である。